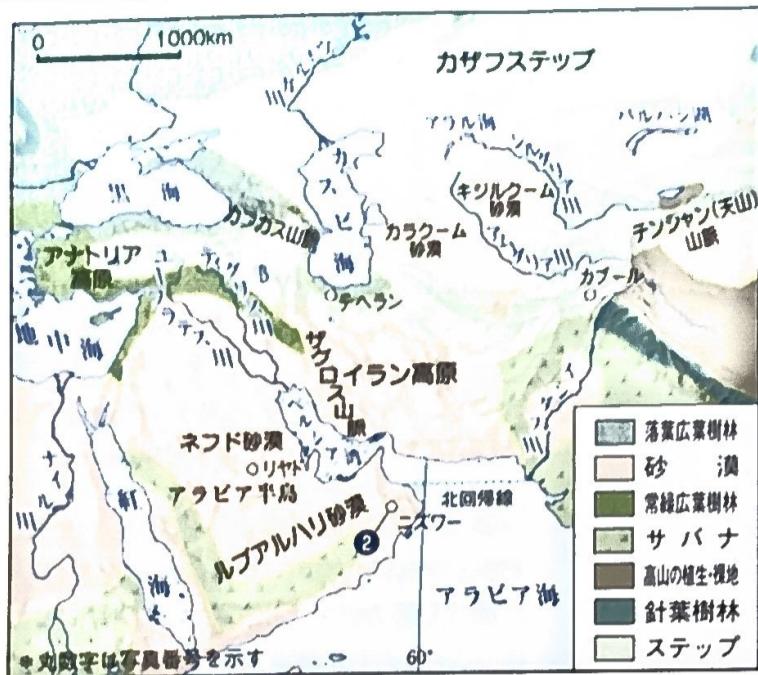


## 5節 西アジアと中央アジア



▲①西アジアと中央アジアの自然環境(Diercke Weltatlas 2008,ほか)



▲②砂漠の中のオアシス(オマーン、ニズワ、2012年撮影)

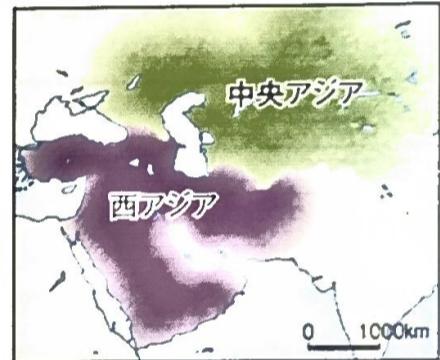
●地域の考察方法● 西アジア(中東ともよばれる)と中央アジアには、乾燥気候が広く分布する(→ p.229)。そのため土地の状態や農業の形態などは似通った点が多い。しかし、歴史的に異なる経緯もあり、それぞれの地域の特殊性もみられる。この節では、類似的な二つの地域を比較し、共通する一般性や地域の特殊性を考察していこう。

### ●乾燥した大地が広がる二つの地域の自然環境

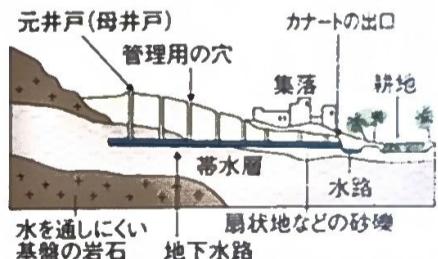
西アジアと中央アジアには、どちらも年降水量が少ない乾燥した地域が多く、<sup>さばく</sup>砂漠やステップが広がっている。乾燥地域では遊牧が<sup>(→ p.96)</sup>、河川や湧水が利用できる地域では灌漑農業<sup>(→ p.94)</sup>が行われている。地中海沿岸は温暖な地中海性気候に属し、小麦などの生育に適した有数の<sup>(→ p.64)</sup>農業地帯でもある。また、外来河川のユーフラテス川・ティグリス<sup>(→ p.62)</sup>川流域は農業・牧畜とともに発達してきた地域で、古代文明が発達した。砂漠に点在するオアシス<sup>(→ p.62)</sup>では、河川や山ろくから地下水路によって水を耕地に導くカナート<sup>(→ 卷末3)</sup>を利用して、なつめやしやすいか、メロン、ぶどうなどの野菜・果物を栽培する農業が成立した。

地形をみると、西アジアでは、イランからトルコにかけて、アルプス=ヒマラヤ造山帯に属するザゲロス山脈をはじめとした新期造山帯が連なり、5000mをこえる高山も多い。そのため、環太平洋造山帯に属する日本と同様に、地震の発生も多い。また、新期造山帯の北には世界最大の湖のカスピ海が、南には安定陸塊のアラビア<sup>(→ p.35)</sup>半島があり、世界最大規模のルブアルハリ砂漠が広がっている。

一方、中央アジアは、その大部分が古期造山帯や安定陸塊に属する。アラル海に流れ込むアムダリア川・シルダリア川の流域では大規模な灌漑開発が行われ、綿花栽培地が拡大した。しかし一方で、アラル海の枯渇の危機<sup>(→ p.126)</sup>という深刻な環境問題も起こっている。



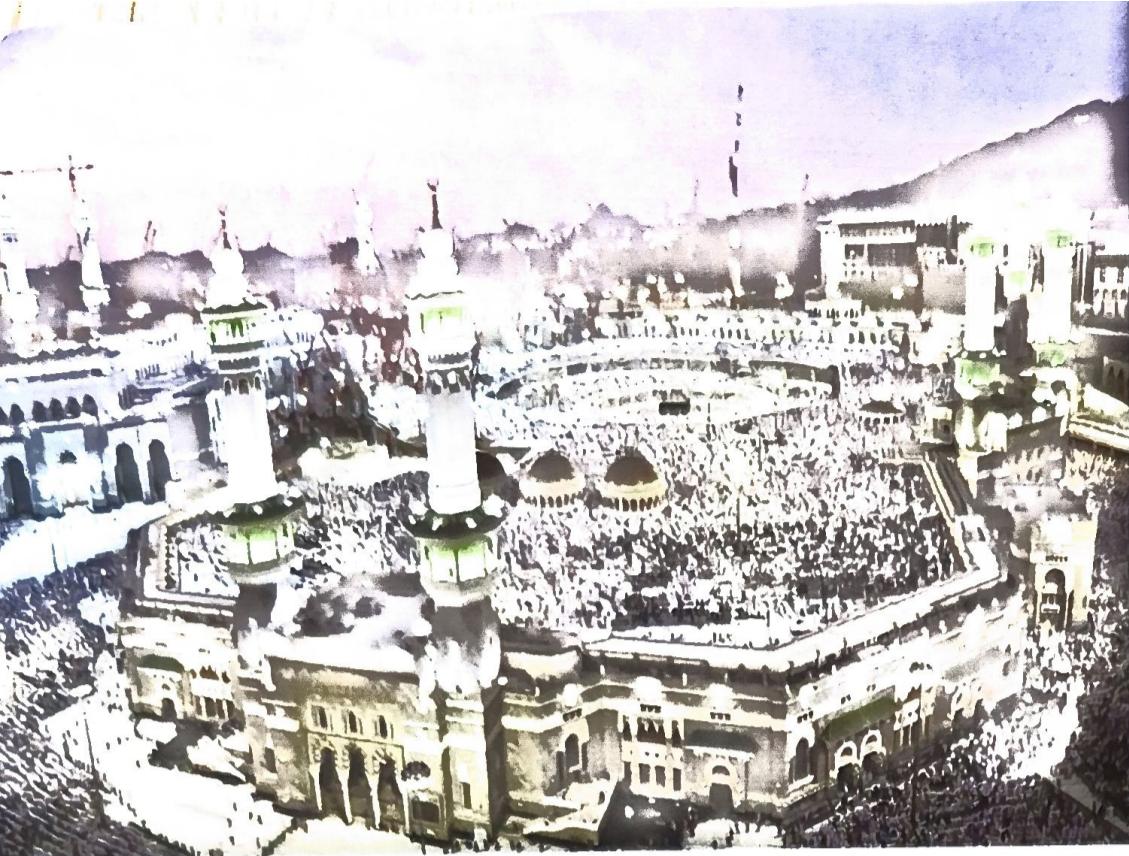
▲③西アジアと中央アジアの範囲 乾燥帶に属する地域のなかでも、中央アジアはソ連時代の影響を強く受けている。



▲④カナート(模式図)

#### 用語解説

**1 カナート** 山ろくなどの地下が豊富な場所から、集落や耕地まで多数の縦穴を掘り、それらの底を横穴で結んでつくる。蒸発を防ぐことができ、イランではカナート、アフガニスタンなどではカレーズ、北アフリカではフォガラとよばれる。



▲❷信者が寝とまりするテント(サウジアラビア、メッカ、2012年撮影) 自前のテントや政府が提供する簡易施設などを利用して滞在する巡礼者も多い。

◀❶カーバ神殿に集まる巡礼者(サウジアラビア、メッカ、2014年撮影) イスラム暦12月の巡礼月には、世界中から毎年200万人もの巡礼者が集まってくる。

## リード

図❶のように西アジアと中央アジアの類似点であるイスラームは、人々の生活にどのような影響を与えていたか、民族や言語の類似点・相違点にも着目しながらとらえていこう。

## リンク→

世界の宗教(p.210)



▲❸メッカの方角を確認することができるスマートフォンのアプリケーション 礼拝の時間や、日の出・日の入りの時間を確認することもできる。

❶ 1年は12か月だが、平年は354日で西暦より短いため、9番目の断食月の季節は年ごとにずれしていく。

## 1 イスラームを中心とした生活文化

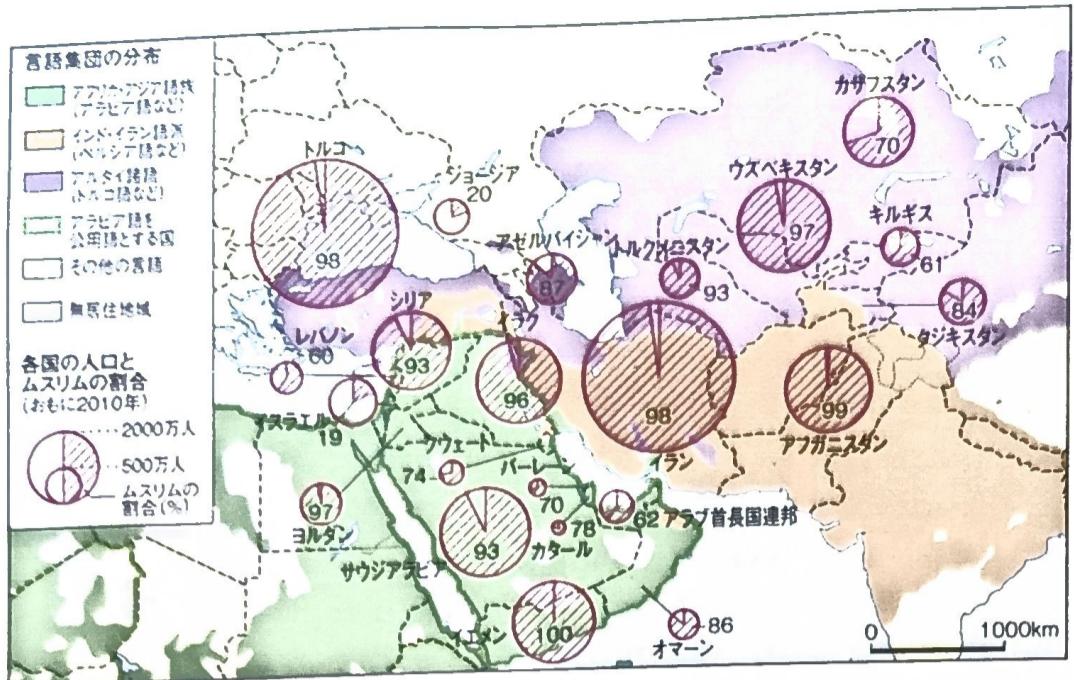
### イスラームの教え

西アジアと中央アジアに共通するイスラームは、  
(p.211)  
7世紀にアラビア半島で生まれ、8世紀に西アジアの全域、そして10世紀には中央アジアに広がった。信仰がどこまで生活に浸透しているかには地域差がある。しかし、イスラームはその教えに「一つであること」という原則があるため、イスラームという宗教の教えに地域による多様性があるわけではない。

イスラームは一神教で、唯一絶対の神アッラーを信仰する。「イスラーム」というアラビア語も、神への絶対的な服従を意味している。偶像の崇拜は厳しく禁じられていて、イスラームを創始した預言者ムハンマド(マホメット)も信仰の対象にならない。聖典のコーラン  
Koran  
(クルアーン)は、ムハンマドに下された神の啓示を記したもので、日常生活のルールが詳しく記されている。

### ムスリムの生活

ムスリムは、神を信じるだけでなく、日常生活のなかで具体的な行為によって信仰を明らかにする必要がある。いつでも行うべき信仰告白、1日5回の礼拝、隨時行うべき喜捨(持たざる者へのほどこし)、イスラーム暦(太陰暦)の9月(ラマダーン月)に行われる断食、一生に一度は行う聖地メッカへの巡礼が、信者が守るべき義務(五行)である。巡礼には毎年世界中から多くのムスリムが集まり、街中が巡礼者であふれる。豊かな人も貧しい人も、みな同じ白衣だけをまとめてカーバ神殿に集まる巡礼は、人種や民族をこえて信徒が一つであることを確認する大規模な宗教行事となっている。



年	事項
7~10世紀末	イスラーム伝播
1869	スエズ運河開通
1901	イギリス、イラン南部の石油採掘権獲得
1945	アラブ連盟結成
1948	イスラエル国建国宣言 第1次中東戦争(パレスチナ難民流出)
1951	イラン、石油の国有化宣言
1956	第2次中東戦争(スエズ戦争～57)
1960	石油輸出国機構(OPEC)発足
1967	第3次中東戦争
1968	アラブ石油輸出国機構(OAPEC)発足
1973	第4次中東戦争
1979	イラン革命 ソ連、アフガニスタン侵攻
1980	イラン・イラク戦争(～88)
1991	湾岸戦争
2001	ソ連解体により、中央アジア諸国独立 同時多発テロ
2003	アメリカ、アフガニスタン攻撃 イラク戦争
2006	イラクで新政府発足
2011	シリアで内戦始まる

# 三つの一神教が 生まれた西アジア

**三つの一神教が  
生まれた西アジア** 西アジアに住む人々は、おもにアラブ、イラン、トルコの三つの民族から成り立っている。民族の違いは言語によるもので、それぞれアラビア語、ペルシア語、トルコ語を話している。<sup>❶</sup>アラビア語とペルシア語ではアラビア文字が、トルコ語ではラテン文字が使われている。<sup>❷</sup>

宗教や生活文化では、三つの民族に共通する面も多い。宗教ではイスラームを信仰するムスリムが多いが、パレスチナやレバノン、シリアは、ユダヤ教やキリスト教の生まれた地であり、ユダヤ教徒、キリスト教徒も暮らしている。西アジアは、アラビア半島に誕生したイスラームを含めると、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという三つの一神教が生まれた地域といえる。

## ソ連の影響を 受けた中央アジア

**ソ連の影響を  
受けた中央アジア** かつてソビエト社会主义共和国連邦(ソ連)  
(→ p.290) に属していた中央アジア諸国は、1990年代の初頭にあいついで独立した。文化的には、ペルシア語系の言語が中心でイラン民族のタジキスタンを除く国では、トルコ語系の言葉を使う民族が多い。しかし、ソ連時代に使われていたキリル文字を使って表記している国は今でも多い。

ロシア系の住民や朝鮮民族の人たちも暮らしていて、バザールでは、トルコ系、イラン系の民族の人たちが売る羊を中心とする肉や乳製品のほか、朝鮮民族の人たちがつくるキムチも売られており、文化の多様性をみることができる。イスラームを信仰する人々が多いが、ソ連時代には<sup>よくあつ</sup>抑圧されていたため、新たにマドラサ（イスラーム神学校）をつくってイスラーム教育を活発にする動きもある。

② アラビア語とペルシア語は、文字は共通しているが文法はまったく異なる言語である。また、トルコでは20世紀初頭までアラビア文字が使われていた。

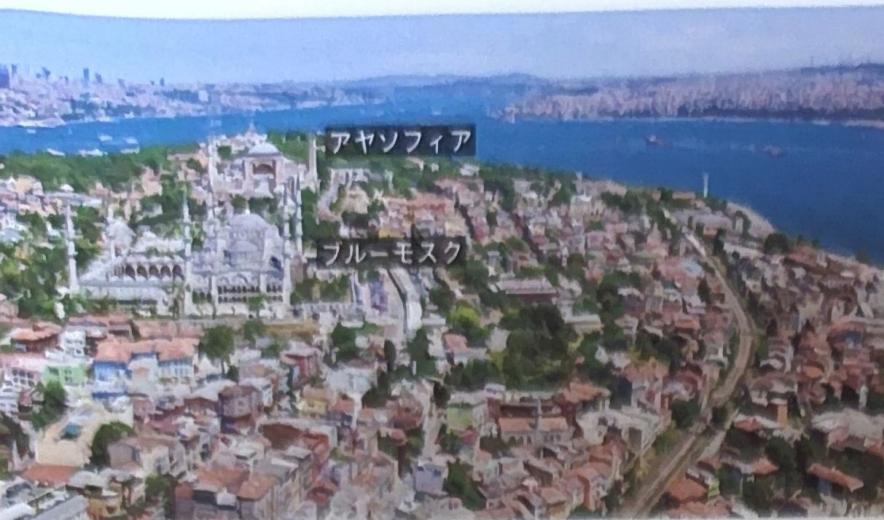
プラスα

## スタンのつく地域

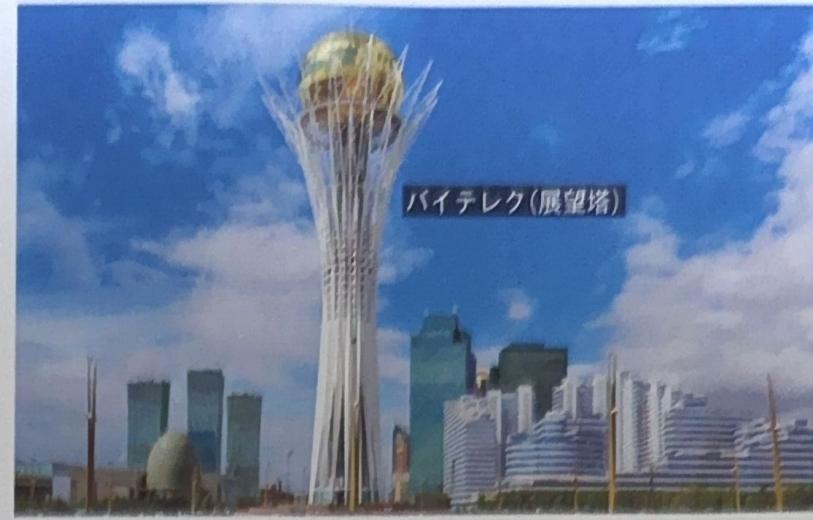
この地域には、ウズベキスタン、カザフスタンのように、末尾に「スタン」とつく地域呼称が多い。「スタン」はペルシア語で「～の国(地)」を意味するので、ウズベク人の国(地)、カザフ人の国(地)ということになる。ウズベキスタンやカザフスタンではトルコ語系の言葉を使う人が多いが、古来、民族が交流していたこの地域では、トルコ語、ペルシア語、アラビア語起源の単語が入りまじって使われることも多い。

## ✓ チェック

西アジアと中央アジアの民族に共通する点、異なる点を「イスラーム」の語句を用いてそれぞれ説明しよう。



▲① イスタンブールの街なみ(トルコ, 2010年撮影) イスタンブールは4世紀ごろから東西交易の要地として繁栄した。ビザンツ帝国時代にはアヤソフィアに代表されるキリスト教文化が、オスマン帝国時代にはブルーモスクに代表されるイスラーム文化が栄えた。



▲② アスタナの街なみ(カザフスタン, 2012年撮影) ソ連時代はツェリノグラード(アクモリンスク)とよばれていたが、1991年の独立時にアクモラ、97年にアルマティから遷都の際にアスタナと改名された。日本はこの首都建設計画を支援し、都市計画案は日本人建築家が担当した。

#### リード

乾燥地域が多い西アジア・中央アジアの都市は、どのような経緯で発達してきたのか、類似点・相違点に注意してとらえていこう。

#### プラスα

##### 都市の人々

交易を軸に都市が発展したことは、人々の生活習慣や価値観にも反映されている。

伝統的な市場であるバザール(アラビア語ではスク)には、衣類・食器・農機具・食料品・香料などを売る店が集まっている。そこでは、買い手と売り手の活発なやりとりを通じた売買や、さまざまな情報交換も行われる。街などにはイスラームのモスクがあり、金曜日にはムスリムは店をしめて礼拝に訪れる。また、外国人の人々が大勢行き来してきたことから、都市住民は異文化に対して開放的であり、客人に対するもてなしを大切にする文化が根づいている。

① ダマスカスを首都としたウマイヤ朝(661~750年)、バグダッドを首都としたアッバース朝(750~1258年)。

#### チェック

西アジアと中央アジアの都市の相違点について、いくつか例をあげて説明しよう。

## 2 交易を軸に発達した都市

### 東西交易の要衝

乾燥した地域が多い西アジアや中央アジアでは、人間は限られた場所にしか定住することができない。

そのため、オアシスのように水の得られる場所に都市が成立した。  
(→ p.62)

遊牧と灌漑農業が発達した西アジアや中央アジアの人々は、古くから商業とその交易の場として都市を発達させた。これらの都市の多くは、中国とヨーロッパを結ぶシルクロードをはじめとした陸上や海上の東西交易路の要衝として重要な役割を果たした。  
(→ p.180 ①)

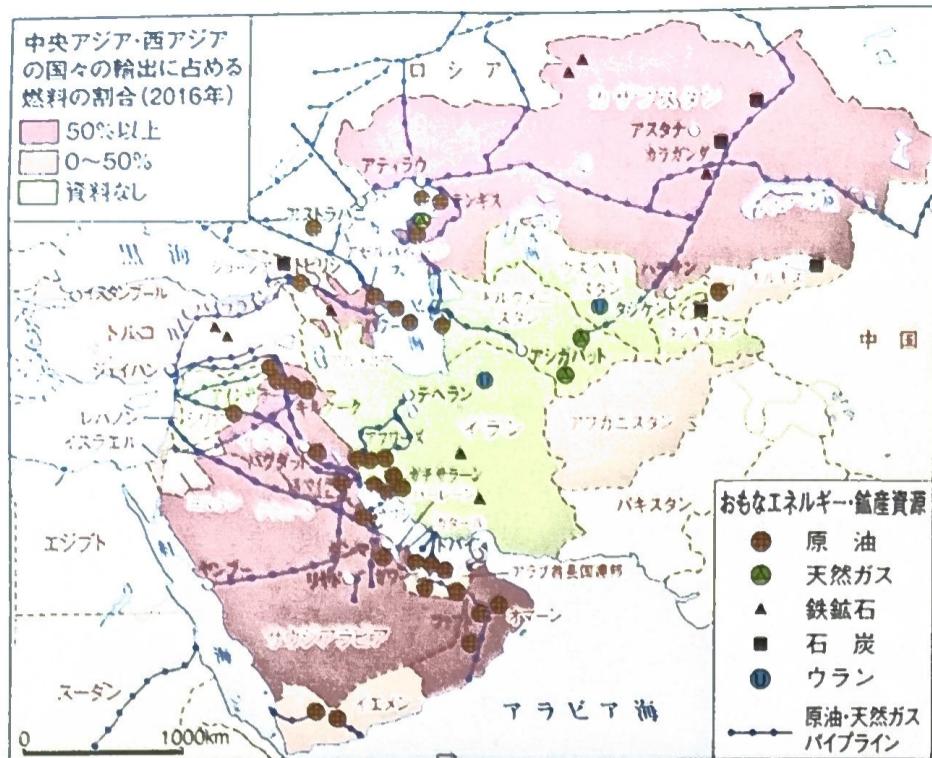
### 西アジアのおもな都市

西アジアでは、ティグリス川やユーフラテス川のような大河川の流域に発達したバグダッド、レバノン山脈から流れる河川の流域に発達したダマスカスなどのように、主要な都市は河川もしくはオアシスの周辺に成立した。また、古代文明はもとより、古代から中世にかけてのイスラーム王朝の時代にも都市中心の文明が発達した。

### 中央アジアのおもな都市

中央アジアでも、ブハラやサマルカンドなどの都市は、シルクロードの拠点として発達しただけでなく、イスラーム文化の中心となっており、現在多くのモスク(イスラームの礼拝堂)やマドラサなどが残されている。  
(→ p.265 ②)

一方、カザフスタンの首都アスタナのように、1990年代にソ連から独立したのちに、行政上の中心として新たに建設された都市も発展を続けている。中央アジア諸国の首都は、いずれもソ連時代に政治の中心としてつくられた。独立後は、ロシアの影響をきらって独自の都市を建設しようとする動きが出ているが、老朽化した都市の基盤を整備するには、ばくだいな費用がかかるなどの課題も多い。



▲④ 石油精製所(サウジアラビア、リヤド近郊)

◀③ 西アジアと中央アジアの資源(World Development Indicators 2017.ほか)

読図 パイプラインのルートに着目しよう。

### 3 豊かな資源と人々の生活

#### 豊かな鉱産・エネルギー資源

西アジアと中央アジアは、原油や天然ガスなどの資源に恵まれた地域である。サウジアラビアやイランなど、ペルシア湾岸の国々では1930年代に石油の採掘が始まり、世界の主要な石油産出地域となつた。(→ p.121 ③④)また、カスピ海周辺にも多くの有望な油田やガス田があり、アゼルバイジャンやカザフスタン・トルクメニスタンなどが開発にしのぎを削っている。

#### 石油資源に依存する西アジア

西アジアでは、石油の採掘が始まると先進国がこぞって資源の争奪に参加し、紛争の原因となった。1970年代に入ると、産油国が原油価格を決定する主導権をにぎるようになったことから、西アジアの国々は急速に豊かになった。とくに1973年に起つた第1次石油危機は、原油価格の高騰をもたらして非産油国の経済に大きな打撃を与え、産油国には巨額の富をもたらした。サウジアラビアやクウェートでは、石油資源をもとに石油化学工業が発達した。しかし、これらの国にとっては、自動車や機械製品などは石油収入による富で外国から輸入するほうが合理的だったため、製造業の発達は遅れがちだった。近年は、アラブ首長国連邦でのリゾート開発やバーレーンでの金融センターの育成などのように、石油収入依存からの脱却をはかるため、観光開発など、他の産業の発展を模索する動きもみられる。

一方、石油が世界的に重要な資源であることから、この地域の紛争や戦争は国際社会を巻き込んだものになりやすい。ペルシア湾周辺ではイラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク戦争などがあいつぐ(→ p.265 ⑤)

#### リード

西アジアと中央アジアは図③のように石油資源に恵まれている。石油資源がそれぞれの地域に与えた影響を、歴史的な流れもふまえて比較していこう。

#### リンク

エネルギーのかなめである石油(p.121)  
資源ナショナリズムと石油をめぐる動き(p.129)

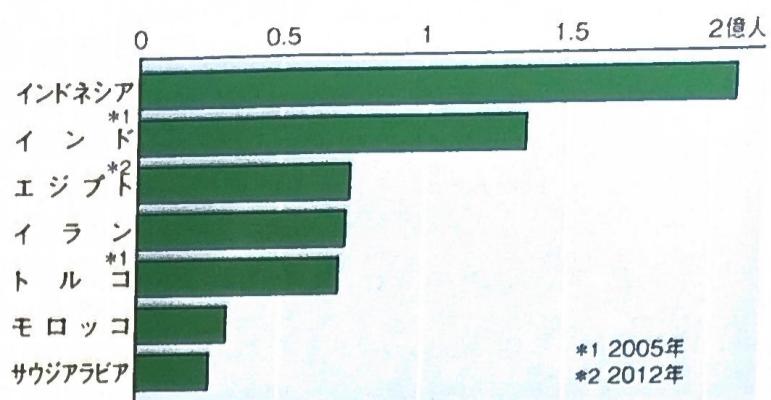


▲⑤ 世界最大の噴水のショーを鑑賞する観光客(アラブ首長国連邦、ドバイ、2014年撮影)

後方の高層ビルは世界一の高さを誇るブルジュ・ハリファ(828m)である。

## ●イスラームに従う国づくりへの動き

多くのムスリムが暮らす西アジアや北アフリカ、そして南アジアから東南アジアにかけてのほとんど の地域は、第二次世界大戦後に独立したのち、いつたんはイスラームから遠ざかって西欧型の近代国家 をめざした。しかし20世紀の末になると、国内に多くの貧困層が存在することや、一部の人々に富や 権力が集中するなどの不平等がめだつようになり、西欧のまねをした国づくりに問題があったという考 えが広まった。そこでイスラームの教えによって、社会や国家を公正なものにしようとするイスラーム 復興運動が活発になった。欧米諸国は、宗教による統治は非民主的だとしているが、その一方で、パレ スチナ問題でアメリカ合衆国がイスラエルを擁護し



### ▲① おもな国のムスリムの数(おもに2010年)

(Time Almanac 2013, ほか)

ていること、アフガニスタンやイラクで欧米諸国が<sup>(2001年)</sup><sup>(2003年)</sup> 戦争を起こしたことなどから、欧米に対するムスリムの反発は強まっている。



一方、パレスチナ人とイスラエルの間の紛争も続いている(パレスチナ問題)。また、この地域は国内の政治で民主主義が発達していないという課題も抱えている。2010年末にチュニジアで始まった民主化運動の「アラブの春」はこの地域にも波及し、シリアは激しい内戦で300万人以上の難民を出している。<sup>(2014年8月末現在)</sup>  
<sup>(→ p.220)</sup>

### 資源開発が進む 中央アジア

かつてソ連の一員だった中央アジア諸国は、社会主義体制の下で十分な開発投資ができる

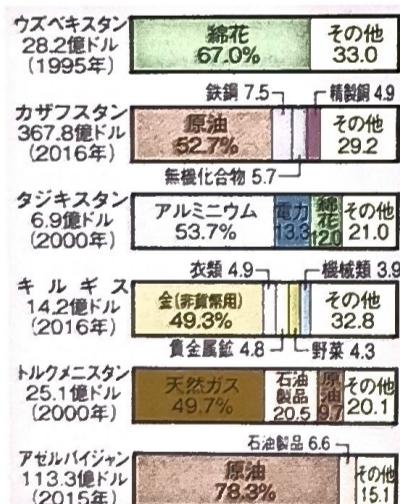
(→ p.215)

かったため、資源開発が今後の経済開発のかぎとなっている。とくにカザフスタンには、広大な国土にレアメタルやウランなど豊富な鉱産資源がある。カザフスタンと日本の間では、ウラン鉱山の共同開発が行われており、日本の原子力政策にとって重要な意味をもつ。そのほか、ウズベキスタンの天然ガス、キルギスの金などの開発は中央アジア諸国の経済発展の基盤となることが期待されている。

しかしこれらの国々は、ソ連時代の権力を引きついだ独裁的な政権が多く、政治体制が安定していない。さらに、ソ連時代からの老朽化した石油精製施設の再建に多額の資金を要することや、周辺諸国との利権争いがからみ、パイプラインによる輸送ルートの建設が遅れていることなど、多くの問題を抱えている。また経済発展の著しい中国の資源需要の増加により、ロシアやヨーロッパなどとの間に、この地域の資源をめぐる争奪戦が起こり始めている。

この地域の政治や経済の安定は、資源を輸入にたよる日本をはじめ、世界の経済に深くかかわる重要な課題となっている。

① 2010年末にチュニジアで発生した反政府デモに端を発し、中東・北アフリカ諸国に拡大した一連の民主化運動のこと。



### ▲② 中央アジア諸国の輸出品 (UN Comtrade)

#### ✓ チェック

西アジアと中央アジアの国々の石油をはじめとする資源の開発とその課題について、類似点と相違点を説明しよう。